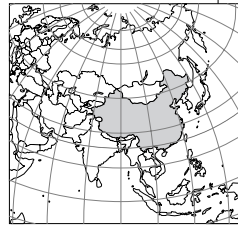


ユニセフ 子ども物語

地球に生きる子どもの暮らし

People's Republic of China

中華人民共和国



リ・アンの歌声

リ・アンの口からこぼれ出した歌声は、ここちよいさざ波となってリ・アンのからだの中にひと吹き風をおこしました。...風だよ、草の穂をわたる風だよ...。リ・アンは、ふと、風の音が聞こえた、と思いました。お下げ髪が歌に合わせて跳ねています。まるですきとおったリ・アンの歌声に、聞いていた人もたしかに風が吹いていくのを感じました。

リ・アンは、本当は聞こえない、なんて誰がわかったでしょう。でも、リ・アンの耳にかかった補聴器を見て、あっとみんな驚きます。本当のところ、リ・アンは5歳のときまで、はっきりとした言葉を話すこともできませんでした。

中国では古くから「耳の聞こえない子は10中9人は話もできない」と言われてきました。それにリ・アンに何がしてあげられるか、家族に教えてくれる人は誰もいませんでした。だから、リ・アンは普通には生きられない、とみんなあきらめていたのです。たった5歳にもならない小さなリ・アンは、そんなようすをながめて、だんだんおとなしい子どもになっていきました。

* * * *

そんなある日のこと、リ・アンの町にチャン・ペイジュ先生がやってきました。チャン先生は、町に住む障害のある子どもたちのようすを聞いてまわり、リ・アンの家にもやってきて、笑顔いっぱい信じられないようなことを言ったのです。

「リ・アンはちゃんと話せるようになりますよ。家族や地域のみんなで力を合わせていきましょう。」

チャン先生はこの町で、障害のある子どもたちが遠くの大きな病院や施設に行かなくてもいろいろな訓練を受けられるようにする、そういう計画のためにやってきたのです。

チャン先生の呼びかけで計画は始まりました。リ・アンのお母さんは、家族クラスに参加することになりました。クラスでは、チャン先生や専門の人が、耳の不自由な子どもも訓練を受ければ多くが話せるようになること、どのような

練習を続ければよいか、ということを知りやすく説明してくれました。話を聞いてお母さんは、リ・アンに補聴器を買うことにしました。補聴器は高価なものでしたが、補助金が



出ることになったのでほっと一安心です。

今度はリ・アンの番です。リ・アンは町なかの幼稚園で話し方のクラスに通えることになりました。そこでリ・アンは、生まれてはじめて4人のともだちに会いました。クラスでは毎日声を出す練習をします。「いいー、あぁ、さん...」なかなかじょうずに発音できず、もどかしくなります。でも先生が舌やのどの使い方を親切に教えてくれます。それに、ともだちと一緒に何かをすることが楽しくてたまりません。その上、幼稚園では耳の聞こえらともだちも遊べます。最初はとまどったみんなも、一緒に遊ぶうちに合図を工夫したりして楽しい遊びができるようになりました。

クラスは午前中でおしまいです。午後、チャン先生は遠くて幼稚園に通えない子どもやその家族を訪問して教えるからです。リ・アンは家に帰るとお母さんを相手に話し方の練習をします。リ・アンは、クラスでも家でも、そのうち近所でも話し方の練習をするようになりました。

* * * *

8歳になって、歌まで歌えるようになったリ・アンの目標は、学校に通えるようになることです。年上のミンミン君はクラスで練習して、今では学校に通っています。チャン先生が来てから、リ・アンは、目の見えないともだちが点字の練習をしたり、歩けなかったともだちが町の人の作った松葉杖や器具を使って歩く練習をしたりするようすを見かけるようになりました。町の人も子どもたちに何ができるかよく話し合っているようです。耳の聞こえない子はみんな話せない、なんて言う人はもういません。

今日はクラスの発表会です。リ・アンの歌声にみんな「ほう」とか「ふう」とか感心しています。チャン先生がいつもの笑顔で大きくうなずきます。「春から学校に行けるかなあ」リ・アンの胸を吹きぬけた風はたしかに春のにおいでした。

(文・構成：日本ユニセフ協会)



障害のある子どもを支援する コミュニティを基盤とした リハビリテーションプログラム Community-Based Rehabilitation (CBR)



©UNICEF/93-1705/Roger Lemoyné

WHO（世界保健機関）は、障害のある人は世界に3億人、その70%が開発途上国に暮らしていると推定しています。障害への対応には「予防」と「リハビリテーション」があります。開発途上国では予防できる原因で障害を負う子どもが多く、ユニセフは保健や栄養などの事業の中で「予防」に重点を置いた活動を続けています。

一方、「リハビリテーション」への取り組みは、開発途上国では始まったばかりです。これまでリハビリテーションは、病院、特殊学校など専門訓練を受けたスタッフのいる施設で実施されるモデルが主流でした。しかし、開発途上国ではこうした施設を利用できる人はほんのわずかに過ぎず、誤解や無知が残る中で障害のある子どもの多くが取り残されてきました。

コミュニティを舞台に

これに対し、「コミュニティを基盤としたリハビリテーションプログラム(以下CBR)」が開発途上国で広がりつつあります。近年ユニセフもこの手法を取り入れた支援活動を各地で実施し、成果をあげています。

CBRは、コミュニティの連携や保健・教育等の基礎社会サービスを通じて、障害のある人びとにリハビリテーション 社会的な機会の平等を 実現をすることを目指しています。

専門施設から遠く離れた人びとには次のようなことが必要です。

障害についての専門的アドバイスが身近に得られること

リハビリテーションなどの訓練がコミュニティ内でできること

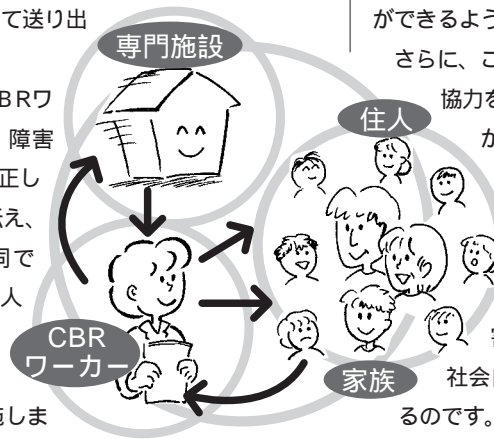
コミュニティを基盤とするCBRは、これ

らの要望にこたえる優れた方法です。

CBRのステップ

CBRは、リハビリテーションに必要な技術や専門知識をコミュニティに移すことから始まります。つまり、専門知識や技能を持った人を育て、各コミュニティに“CBRワーカー”として送り出すのです。

各地のCBRワーカーは、障害についての正しい知識を伝え、住民と共同で障害のある人びとへの支援の方策を考え、実施しま



す。障害のある子どもの家族同士がグループをつくったり、家族のためのクラスが開かれます。ここでは、「障害のある子どもも他の子どもと同じ権利や可能性を持っている」という認識を深め、家族にできる具体的な訓練の方法が伝えられます。その結果、家庭で子どもにリハビリテーションを行うことができるようになります。

さらに、このプログラムは活動への参加や協力を通じてコミュニティ全体へと広がります。CBRは、必要なときにはCBRワーカーを通じて専門的な助けを得つつ、実際の行動は住民が考えて行う、というものです。その過程は、障害に対する人びとの意識を変え、社会自体を改善していくこともできるのです。

中国におけるCBRの成功

ひとりっ子政策をとる中国では、第一子が障害のある子どもであった場合、もうひとり子どもを持つことが許されています。また、障害のある子どもへの関心と理解およびケアが課題となっていました。

ユニセフは、1989年から中国障害者連合(China Disabled Persons' Federation、NGO)と、障害のある子どもたちに対するCBRプロジェクトを開始しました。プロジェクトの第3期(1996-2000年)にあたる現在、27郡が対象となっています。

そのひとつ、山東省にある人口160万人のタンジョウ郡には1800人の障害のある子どもが登録されています。郡では40人のCBRワーカーが訓練を受け、それぞれのコミュニティに戻り活動を始めました。

子どもたちには障害の状況に応じて個別のプランが作成されました。リ・アンのように耳の不自由な子どもの両親には無料のクラスが開かれ、訓練の方法などを

学んだ両親は、それを家庭に帰って実践できるようになりました。1485km²という広い地域に町や村、集落が点在するタンジョウ郡では、中心地に子どもを集めるよりも、各家庭で継続的にリハビリテーションを行うことが効果的です。実際、耳の不自由な子どもに対するエコー・トレーニングは最も効果をあげ、タンジョウ郡に暮らす500人の耳の不自由な子どものうち137人は話し方に大きな改善が見られました。

子どもの障害について何も聞くことのできなかつた親たちが専門的な意見や訓練に触れることで変化がもたらされます。ハン・ウエンチャン君は、生まれたときの股関節脱臼がもつて4歳の時まで歩けませんでした。両親はCBRワーカーの助言に従ってウエンチャン君に歩行訓練と外科手術を受けさせました。その結果、1年後ウエンチャン君はまったく問題なく歩けるようになりました。

貧しい農村ではたとえ障害者向けのサービスがあっても、その費用をまかなえる家庭はごくわずかでした。しかし

現在、27郡の障害のある子どもの85%がこのプロジェクトによって直接の恩恵を受けています。成果を受けてタンジョウ郡のようにこの事業にこれまでの3倍以上の予算の支出を決めた自治体もあります。現在、タンジョウ郡など3郡が中心となってCBRの全国的なガイドラインが策定されつつあり、CBRのモデルは全国に広がろうとしています。



指のリハビリを受ける子ども ©UNICEF/93-170/Roger Lemoyné